

## 越前丹山文庫所蔵

### 麗藏校合黄檗版一切経について

田代俊孝

#### 一

黄檗の鉄眼は、自ら願主となり、寛文九年(一六六九)より、十三年を費し、苦難の末黄檗版一切経を刻板した。この版は、方冊本として、入手並に読解しやすかつたため広く国内に普及した。しかし、これは明の万暦版を台本として、そのまま覆刻したため、その短所錯誤をそのまま踏襲した。従って、その後の篤学者、すなわち忍漱(一六四五—一七一)、順芸(一七八五—一八四七)らはそれを遺憾とし、校正事業を起こさんとした。忍漱は寶永二年(一七〇六)より五年を費し、また順芸は文政九年(一八二六)より十余年を費し、いずれも建仁寺蔵の高麗版を以って対校した。

特に順芸は、彼が一蔵を三遍に渡り校合し、完成させた翌天保八年(一八三七)建仁寺出火により高麗版原本をほとんど焼失したため、更にもう一蔵を東本願寺の命により、転写

すべく、その事業を起こした。しかし、着手しながら未だそれを果さずして、途で病に倒れ、終に弘化四年(一八四七)九月二十八日六十七歳で没した。その後、長子順尊は、父の志を継ぎ、順芸没後十年を経た安政二年(一八五六)一応の完成を見て本山へ納めた。今日、それらは浄勝寺と大谷大学図書館にそれぞれ襲蔵されている。また、順芸は、黄檗版に欠如する五百余巻を謹直な書体で、麗藏そのままに模して謄写しており、その業績は大藏会等を通し、学界では早くから注目されていた。しかし、藏経研究すべてに共通することであるが、量的に大部であり、しかも、その整理が煩雑で多くの時間を要するため、その研究が遅れていることは否めない。

はからずも、今回特にその浄勝寺より依頼を受け、大谷大学名誉教授藤原幸章博士、同朋大学助教織田顕信氏とともに経堂(丹山文庫)の調査に当った。昨年十月より四期十一

日間を費して、このほど第一次調査を一応終えた。今後さらに調査研究を進めねばならないが、特に蔵経関係の調査結果の中間報告をここに行ってみたいと思う。

ところで、丹山の号で知られる順芸は、天明五年越前丹生郡下糸生浄勝寺に生まれ、鳥山、希芳、水月、来々子、志道とも号した。更に院号を信珠院と号し、席名を随願と称した。寛政三年（一七九一）七歳の時、大谷派講師香月院深助に従って、その門人となり、その社中名簿である『垂天結社簿』には、

一、越前糸生村浄勝寺新発意 随願（花押）

更名 丹山

右加州覚城寮司先容

と記されている。その後、高倉学寮の擬寮司、寮司の学職を得、文政三年（一八二〇）夏に『金剛般若経讚述』を会得し、まもなく、『同聞記』一卷を刊行している。もちろん、彼の業績として、第一に一切経校合をあげるべきであるが、そのほか『金剛讚述試講並科』三卷、『称名信楽二願希決』二卷、『御文研鏡』一卷、『御伝款啓』三卷等、二十数点を数える。就中、『称名信楽二願希決』は存覚の『六要鈔』の深旨を探って行信論研究に独創的見地を開き、近世近代の真宗学界に著しい貢献をし、今日なおその領解が迎がれている。また、一面では文芸の才があり、多くの詩歌を残し、橘杏斎、

越前丹山文庫所蔵麗蔵校合黄檗版一切経について（田代）

頼山陽、加茂季鷹、香川景樹などと親交があった。中でも頼山陽は文化十二年（一八一五）浄勝寺を訪れ、『不如帰亭記』を作って順芸に贈っている。

## 二

さて、丹山文庫は、現在も、福井県丹生郡朝日町下糸生浄勝寺山内に存する。本堂背後の山上、やや南寄りに位置し、瓦葺四間四面二方戸前口三返宛観音開の堂である。当文庫には一切経の外、内典約三千冊、外典約千五百冊が襲蔵されている。保存状況は、往年の虫干しのため散乱甚しく、帙は傷んでほとんど無く、題簽も約三分の一が脱落していた。また、綴じ糸の切れたものも一部あった。しかし、整理復元の結果、全般に虫害は少なく、特に一切経は傷みが少なかった。三回に渡る校合を示す奥書も鮮かに読みとれる。ただ、黄檗版に欠如する部分の高麗版からの謄写分については、八十二卷十四冊が綴て方冊本にしてあったが、残り約四百五十巻は、おおよそ一卷ごとに紙縹で綴てあるものの、混入散乱甚しい。しかし、いずれも紙質、墨質が良く判読には何ら支障はなかった。

当文庫に襲蔵する蔵経は、

（一）麗蔵校合黄檗版一切経及補正分

（麗蔵によって黄檗版を校正し、欠如分を謄写して補ったもの）

越前丹山文庫所藏麗藏校合黃樂版一切経について (田代)

二二二

(二)崇禎版 (明、崇禎五年 (一六三二) 孟夏月徑山化城寺藏)

首楞嚴経義海 三十卷 六冊 (順芸の校合無)

(三)部分覆刻万曆版

(日本、天和二年竜集壬戌季秋穀日一領陽書肆等版行)

瑜伽師地論 百卷 二十四冊 (順芸の校合無)

(四)部分覆刻高麗版

(題簽に「麗藏○○○経」と書かれており、返り点、送り仮名まで刷られているので江戸時代の町版と思われる。尚、各巻奥書には「乙巳歳高麗国大藏都監奉勅雕造」と印刷されており、同様のものが二種類ある。)

A 仏説十地経九卷三冊、大集大虚空藏菩薩所問経八卷

二冊等二十七卷十三冊

B 根本薩婆多部律撰 六卷二冊 (A Bとも順芸の校合有)

このほか忍激校合本の転写本及単行の町版等が多数ある。この中で特に注目すべきものは(一)と(二)であるが今は(一)について考えてみたい。

ところで順芸は、何故に、この校合の志を起こしたのであるらうか。藏経校合が一応完了した「天保七年歳次丙申二月二十一日建仁寺通銓撰」の奥書を持つ藏室碑牌によれば、

順芸上人嘗校金剛経及論其無著論窺基所会釈偏合於高麗本故知麗藏之勝矣。当今置大藏又欲就麗本校雙遺諸後

来上也

とある。このことは、当文庫襲藏の諸本によっても知ることができる。

すなわち、順芸は、上述の如く文政三年夏『金剛般若経讃述』を会読している。この時順芸は麗本、宋本に対校した『金剛般若経』を、浄勝寺藏版で以って刊行している。これに先だち、その準備作業として文化十年(一八一三)七月鹿ヶ谷法然院を訪ね、宝永年間に忍激が校合した一切経の中より、『能断金剛般若波羅密多経』三卷、『金剛般若波羅密経』三卷、及び天親と無著の『金剛般若波羅密経論』各三卷を写している。各巻末に書写対校を示す奥書がある。今『能断金剛般若波羅密多経』を例に示す。

宝永丙戌六月朔日沙門純正初校已畢

宝永丙戌七月五日沙門益翁覆校已畢

宝永庚寅五月九日沙門慧空三校畢

文化十年癸酉秋七月七日於師子谷法然院

丈室伏乞所藏經本遂拜写加再校了釈順芸有九

同廿七日乞知恩院所藏宋本校合畢同

麗本則書曰宋同单曰宋者不同余本也

順芸志道

これによれば、順芸は忍激の校合本を書写し、さらに知恩院藏の宋本との校合をしている。

また、無著の『金剛般若波羅密経論』三卷には上と同様の

奥書のほかに、

此無著金剛般若論三卷与麗本<sub>一</sub>対関其題目訳号俱同<sub>二</sub>而文中差異太多。故不煩<sub>三</sub>点校<sub>四</sub>、麗藏全本<sub>一</sub>備之<sub>二</sub>別録<sub>一</sub>。

と記されている。従つて、その「別録」には「麗本金剛般若

論上下完 無著菩薩造」と題し、奥書に

宝永四丁亥歳十月廿一日釈氏潤書写

宝永四丁亥歳十月廿八日大善初校

文化十年歳次癸酉秋七月九日於獅子谷法然院丈室乞得

麗藏書写本遂拜写 一校了 順芸志道

文政二年夏四月十七日夜於洛陽寓舎加拜

読且傍注会釈中之分拜竟

と記されている。すなわち、順芸は文政三年の『金剛般若讚述』会説を前にして、それに関係する経論を各版と校合、謄写する中で高麗版の善本なるを知つたのである。かくて、一切経校合の志を起したのである。

然るに順芸は、文政五年（一八二二）建仁寺通銓に麗藏閱覽を請うたのである。しかし、通銓が、対馬国に赴くため叶わず、その任満を待つて文政九年（一八二六）より建仁寺内にてこの事業が始まつたのである。そして、それが、一応の完成を見たのは天保七年（一八三六）である。しかし、その後も一部の校合及び欠如分の謄写は完全を期すまで続けられた。

この時、校合に助力したのは順尊、順護の二子のほか、寮司伝善寺大禿、泉福寺香巖、大進、徹讓、了哲、知守、高野山の学応、一淨らの僧がおり、さらに、医師中山玄碩、公家橘通、藤原寛信ら、多数の俗人も加わつていた。また、その後、本山の命によりこれを転写した時には寮司観沖、了教、天琳らも加わつており、その数は四十名近くになる。

### 三

さて、一切経の校合は、麗藏、槩藏共通して蔵される經典すべてになされている。『大明三蔵聖教目録』でいえば、般若部第一帙

『大般若波羅密多経』卷一（天一）

（文政九年丙戌春二月廿二日亥刻三校了順芸）

より、宋元続入蔵部 第二〇六帙

『護命放生軌儀法』（桓十）

（天保二年辛卯季夏十月初校 天璽

同 六月十二日再校校異八所 玄一

天保七年丙申五月十九日三校了沙弥順芸）

までと、同部第二三八帙『一切経音義』卷一（郡一）から、同部第二三九帙『武周刊定衆経目録』卷第十四

（天保二年歳次辛卯夏五月十八日初校 橘通

同 五月十八日再校校異十三所 玄一

越前丹山文庫所藏麗藏校合黄槩版一切経について (田代)

天保六年乙未六月三日三校了 釈順芸)

までで、そのうち麗藏に含まれないもの、あるいは建仁寺に所蔵されなかったもので、忍激本によっても校合できなかつたものを除いて五四七二巻、一五一三冊である。

尚、そのうち『大智度論』百巻、『撰大乘論釈』四十八巻、『十住毗婆沙論』十五巻、等三百巻は、鹿ヶ谷忍激本を転写したものに建仁寺本を対校している。

また、謄写分(槩版欠)のうち『仏名経』(根本説一切有部毗奈耶葉事)、『高麗国大蔵校正別録』等八十二巻十四冊は綴であるが、残りは今後の整理復元を待たねばならない。

一方、安政三年に本山へ献上した一切経(現、大谷大学図書館蔵)は、浄勝寺本を転写したもので、いずれも次のような奥書がついている。『大般若波羅密多経』巻第一には、

天保十二年辛丑冬十月十五月初二校 観沖

同 十三年壬寅春正月六日 三校 順芸

となつている。しかし、これは、第二〇六帙『護命放生軌儀法』までで、しかも、順芸の名が見られるのは経部のみである。(但し、第一五九帙『阿毗達磨俱舍論』校合無)また、五百余巻の謄写分も含まれていない。しかし、これは順芸の示寂によるためであり、むしろ、逆にその遺志が継がれ、一応完成せられたことは賞讃されねばならない。(註省略)

(同朋学園仏教文化研究所研究員)

掲載されなかつた諸氏の発表題目(八)

一三四

最蓮房あて御書の問題点 中條暁秀(身延山短大) まことの一念三千に就て 林日邵 日蓮教学における信と仏性 渡辺宝陽(立正大) 福沢諭吉の無信心について 金森西叡(富山高等専門学校) 禪に於ける超越の問題 西村恵信(花園大) 伝道上からみた仏教々理の臨床的考察(2) 皆川広義(駒沢大) 文学作品の教化教材としての受容について——作家における死の原体験とその作品世界—— 木村誠治(曹洞宗教化研修所) 近代における仏教讃歌と伝道(一) 白金昭文(足利短大) 羽溪了諦の仏教教育学について 永井隆正(知恩院浄土宗学研究所) 東洋的教育論 櫻木茂(久留米工業大) 印度系思想の日本の受容(5) 田中孝海(京都学園大) 七〇年代のマレーシアにおける仏教の現状 渡辺文麿(近畿大) 発心集における法華経について 岩田諦静(立正大法華経文化研究所) 迷信殺人の一考察——宗教民俗の社会病理現象—— 荒井貢次郎(東洋大) 道元の「般若」とスピノザの「直観知」 笠井貞(群馬大) グル密教の形成 壁瀬灌雄(寺院住職)